

本日は伊丹RC岩井様ようこそお越し下さいました。ごゆっくりお過ごし下さい。

7月14日(土)泉会員主催のコンサートが行われ、井上晃一会員・中川尚美会員が参加されました、応援の皆様ご苦労様でした。

7月15日(日)には、神戸で危機管理セミナー・青少年奉仕セミナーが行われ、谷口室長と野並青少年奉仕委員長と共に出席しました。このようなセミナーは分かりやすく、ロータリーについて学ばなければならないという意欲にかられます。ぜひ機会があれば参加ください。

例会出席は大切というか会員の義務ですが、それだけでなく、この種のセミナーも出席を心掛けることは、ロータリアン同士の親睦や、奉仕のこころを育むためには大切なことだと思います。

今日はNHK大河ドラマ「西郷どん」と「奄美群島」のお話をします。名もないう下級武士「西郷」が、なぜ明治維新の舞台に登場したのか、私の両親のふるさと奄美を交えてお話しします。



西郷隆盛

西郷は薩摩、今の鹿児島市内、城下町加治屋町界限で西郷家の長男として生まれています。家柄は、下級武士で下から数えて二番目という士分です。そのような環境の中で、薩摩独特の「郷中教育」と呼ばれる教育制度で育ちました。その特徴は武士の身分差に関係なく行われるものでした。

ここでは、若者集団による自主性を重んじた教育制度が取られました。鹿児島城下36の町単位に若者集団が設けられ、加治屋町を例にとれば約70戸の青少年が集まり、年少者同士で解決できない場合「郷中頭」というリーダーに頼りました。郷中頭の指導のもと、問題が起きると即座に判断、決断し行動を起こすという能力を培うことが求められ、とっさに判断し行動する「詮議」という訓練を日常的に行っていました。こうした切磋琢磨により、郷中の意見は郷中頭に集約されていましたから心ある藩主なら郷中頭の意見は重要な情報源になったはずでした。

島津斉彬が、西郷の意見書に注目したのは、実に理にかなっていません。そこに注目した斉彬は、会ったこともない西郷を江戸への供周りに加えました。

こうして斉彬に目をかけられた西郷は、各藩の俊才と交際を深め、時勢を知り歴史の表舞台に駆け上がりました。

ところが斉彬の死後、羅針盤を失い、西郷のそれからの人生は周知のように波乱に満ちたものでした。「安政の大獄」で追われる僧「月照」との心中事件や三度の島送り(奄美・徳之島・沖永良部島)合わせて四年間をへて、なおもその人脈・人望・仁徳が求められ、ついには「維新の三傑」にまで上り詰めた西郷の力は、実は斉彬の意を受けた広い活動の中で培われたものと言えるでしょう。西郷は最終舞台、西南戦争で人生の幕を閉じました。奄美へ下ってから、寛容と優しさを身に着け、愛加那という伴侶に恵まれ、一男一女をもうけています。長男、菊次郎は後の京都市長となり、日本で始めて市電を走らせた事で有名です。長女菊子は、日露戦争の陸軍大将、大山巖の弟の奥さんになっています。

ちなみに「奄美大島」「徳之島」「沖縄県北部及び西表島」は「世界自然遺産」への登録を目指しています。以上会長の時間とします。



島津斉彬



徳之島で闘牛体験